入選

おばあちゃんの小さな庭

佐藤　久美　　埼玉県朝霧市　　三十一歳

「長く生きすぎちゃったみたいね」

九十二歳の祖母が言った。仲良しだった近所の友達の不幸が続いた頃のことだ。

祖父は十五年前に亡くなった。父と二人暮らしの祖母は、足が悪くて一人では外出できない。日中はソファに座り、じっと目をつむっている。疲れると言ってテレビもつけないし、得意だった手芸もやめてしまった。

祖母の寂しい言葉を聞いて、植物を育てて元気が出た十代の頃の自分を思い出した。育つものは生きる力をくれるはずだ。早速、小さなガラスの器に三つの観葉植物を寄せ植えしてプレゼントした。

一ヶ月位経った頃だろうか。実家に帰って驚いた。祖母の顔がとても明るかったのだ。

「小さなお庭みたいでかわいいのよ。小さくても、ちゃんと緑の匂いがするの」

そう言って、白いふかふかした両手で寄せ植えを持ちあげて見せてくれた。

淡いピンクの斑が入ったヒポエステスは祖母の優しさに、ワイヤープランツは祖母のかわいらしさにぴったりだった。真ん中に植えたドラセナは、葉が上に向かって伸びて凛としている。私にはそれが、大切な人を一人一人見送りながら強く生きてきた祖母のように思えた。

その日、ドラセナに小さな新しい葉が出てきているのを見つけて祖母は優しく笑った。生きる喜びは、生活のなかにあった。

三年が経ち、祖母はもういない。でも、「おばあちゃんの小さな庭」は今も生き続けている。